

あさおねっ

～朝起きたらおねしょ少女だった件～
#3 始まりの終わり

沼米 さくら
クロスロード文庫

あさおねっ

#3 始まりの終わり

沼米 さくら

桜花庵 さくら工房 クロスロード文庫



目次
いつかめ

5



いくつかめ

虚空、虚無。真つ暗闇、また俺は浮遊していて。

「……またか」

力なく咳く声は明らかに若い男のもので、また自分の身体は男に戻ってしまったのだと確信する。

そんなときである。

「蒼にい」

どこからともなく、幼女の声が出た。

「やつと話せるようになった」

その声はどこか安堵したようで、しかし。

「……あなたは、誰ですか？」

聞かずにはいられなかった。この声を聴くたびに胸に抱いていた疑問。

発言すると、小さな笑い声が聞こえて。

「ふふ、決まってるじゃん」

「え？」

俺が素っ頓狂な声を上げると。

「それは——」

彼女は、勿体つけるかのように一呼吸おいて、告げた。

「それは、あなた自身」

「は？」

次の瞬間、発した声は甲高く、目には光が飛び込む。

「あ、あさ……か……」

上体を起こして軽く腕を伸ばして深呼吸。そのままベッドから飛び降りた。

この体にもだいたい慣れてきたな……。

この姿になってまだ一週間も経ってないはずなのに、最初からこの姿であったかのように慣れてしまっている自分がある。

……そして、自分の失敗の香りも、また嗅ぎなれてしまっていたように感じる。

「おねしょ……今日もいっぱいしちやつてるよ……」

寝る前にあてられたテープタイプのおむつは、寝ている間に出されたおしっこでもうすでにパンパンに膨らみ切っていた。ぶよぶよになったその赤ちゃん向けの下着の中は、じめじめべ

たべたで気持ちが悪い。

早く変えてもらわなくちゃ……いや、シャワーでも浴びようかな。
考えつつ、俺はゆつくりと、ぎこちない足取りでリビングへと向かった。

「……朝のシャワーって気持ちいいよな」

「ぐすっ、ぐすっ……」

「落ち着けよ……。いったい何があったんだ？」

「うわあああん！」

「ちよっ、泣くなつて！」

風呂場。俺は、泣き出した瑠璃の頭を撫でていた。

「よーよし。マジでどうしたんだ？」

「おふとんにちつちこぼれてた」

「……いまなんて？」

「おむちゆからちつちあふれてて……べちよべちよで……うわああん！」

「あー」

なるほど、おねしよしちゃったのか。……俺はため息をついて。

「……よし」

意を決してシャワーを手に取り瑠璃に向け、手元のボタンを一押しすると。

「きゃあっ！」

水圧が体を押すと同時に、瑠璃は悲鳴を上げた。

跳ね返ってきた冷たい水しぶきを浴びながら俺はいたずらに笑う。

「ほら、これで目が覚めたか？」

「覚めたよ！ めっちゃ覚めた！ ちよ、寒いってバカ兄貴！」

よし、作戦成功。俺はガッツポーズ——したらシャワーがいきなり暴れだした！

「あーばばばばちよまってやばいやばい当たるあ——」

シャワーヘッドがゴツンと頭に当たった。ついでに後ろから転んでお湯の入っていない浴槽に仰向けに寝転がる形になり、さっき自分で出した水が俺に降りかかる。

その冷ややかな感覚は俺の幼い膀胱を容赦なくくすぐって——水流に黄色いものが混じりだすのに時間はかからなかった。

「……体、洗おうか」

出し終わってから一呼吸おいて言ってみると、瑠璃は笑いつつも一言だけ口にした。

「だね」

体を拭き、瑠璃に服を着せられ——今日は淡いピンク色で裾や袖にフリルとついでにお花の

刺繍がついたワンピースだった——を着せられて。

「じゃあ、行つてくる。……大丈夫？」

「ああ、大丈夫だから、行つてこい」

「……ん」

その瑠璃が中学校へと出かけると、俺は背伸びをして、二階にある自分の部屋へ。そこでスマホにたまったメッセージを流し見た。

……新しいのもう二百個くらい。

安否確認のほか、クラス内のチャットでは考察なんかもされていた。中には死亡説を唱えるやつまでいて、少し背筋が寒くなる。

その中で、気になるメッセージを見つけた。

ジロー へなあ、もういつそアイツのうち見に行こうぜ？
ミツタカ へ知ってるやつおりゅ？
いいんちよへあ、私知ってるー
ジロー へお、いいんちよセンキユ。ところで、明日創立記念日だよな？
TKOM へそれがどした？

ジロー 〈あのバカの家に突撃したろうぜwww〉

いいんちよ 〈いいねいいね〉

ジロー 〈あ、いいんちよとロリコンズは強制参加な〉

TKOM 〈ど う し て〉

ミツタカ 〈ざまあwww俺は行かんからなwww〉

TKOM 〈まあいいけどさ。ロリコンズ出動ッ！〉

ジロー 〈じゃあ、明日の朝八時半に駅で集合な〉

TKOM 〈わかった〉

いいんちよ 〈へりー〉

これが書かれたのは、どうやら昨日らしい。昨日の明日は——今日じゃん！

ロリコンズってなんだよとかどうして誰にも教えていないはずの住所を知られてしまった。
 んだよとかいろいろツッコミたい点はあるものの、いまはもうそれどころではなかった。

“ジロー”こと富永次朗とみながじろうと、“TKOM”こと市道孝臣しどうたかおみとはロリコン仲間としてつるんでいた仲だ。すなわち、ロリになった今の俺の姿を見たら何をしだすかわからない。

そして“いいんちよ”こと学級委員長の三島さん。下の名前はわかんないしそもそもほぼ話したことはないはずなのだが、なんで俺の家を知ってるんだ。俺のファンなのか？ ストーカー

「なのか？ ……どっちも可能性があつてしまうあたり、頭が痛くなつてくるのだが。
なにはともあれ、俺がこの体になつたなんてこと知られたら、俺はもう生きていける自信がない。」

集合時間は八時半ごろ、ということとは——時計がさす時刻は、現在八時四十五分。最寄り駅からここまで、徒歩十五分くらい。さんじゅうたすじゅうごはよんじゅうご……。

時間はもう残されていなかったことを悟った刹那、インターホンの音が家中を包み込んだ。俺は心の中で悲鳴を上げた。

ピンポンピンポンと何度もインターホンが鳴らされる。

「どうしようどうしようどうしよう」

俺は二階の自室から玄関を見下ろし、そこにいる三人の高校生を見ておびえていた。

幼女になったことを知られたくない。恥ずかしいし……というかこんなことになるなんて考えてもいなかった……。

「いないふりをしてやり過ごすか……と、思考したとき、声が聞こえた。」

「おーい、日向ー？ いないかー？」

「待て待て、鍵が開いてたからって勝手に入るのはいかんだろ」

「いいのよそのくらい。日向くん！」

……鍵、閉め忘れてたのか。

ナチュラルに不法侵入キメてくるとは流石に思わなんだ。

しかし、ここまで来られたら仕方ない。腹をくくるしかあるまい。要するに俺が幼女になつてしまったと悟らせなければいいのだ。

深呼吸。息を整えて――

幼女モード起動ッ！ きゆるんツツ!!

――心の中で叫んだ。

ここで説明しよう！

幼女モードとは、幼女のふりをする事で完全に幼女に擬態し相手に警戒心を抱かせることを防ぐ、超高等技術である!!

普段からの幼女観察、さらに昨日なのちゃんたちと遊んだり他のリアル幼稚園児と触れあつたりしたことで、その動きや思考などがある程度真似ることが可能となったのだ！ ありがとう、なのちゃん!! ありがとう、幼女たちよ!!

……なに考えてんだろ、俺。

しかし、時間もなければ方法もなく、誤魔化すのが最善手なのだ。いや、これでバレた時の

羞恥度がさらに高まったわけだけど。

三人の声が近づく。

——敵接近。侵入までたぶんあと三秒前……二……一——。

ドアが開かれ、一週間近く見ていなかった彼らの顔が見えた。ついにその時がやってきたのだ。

俺は息を思いつきり吸って。

「お、おにーさん、おねーさん……だあれ？」

怯えたふりをしてみることにした。

「あー……君のお兄ちゃんを探しているんだけど」

優しい気に話しかけてきた。

……こいつらはロリコンだけど悪い奴らじゃないし、襲いはしないだろう。いや、正体がバレたらどうなるかはもう考えたくもないけど。

とりあえず俺は幼女モードを維持したまま答えた。

「そーくんのこと？」

「そうそう！」

「……あー……えーっと……」

言い訳考えてなかった。思考すること三秒。

ああもう出まかせでどうにかするしかねえ！

「ん……あ、たしかね、わたしと……とれーど？ でがいこくにいったのー」

「外国っ!」

ジローがすつとんきような声をあげ、唯一の女子である三島さんは思い出したように。

「そういえば、日向君は昔海外にいたとか、しかも両親は今も海外逃亡だとかでないとか、

日向君ファンクラブの中では噂になってるわね……」

「聞いたことないんですが!? いや確かに英語がペラッペラだったのはそれで辻褄が合うんだ

けど!」

現場は大混乱。なんで海外にいたこと知ってるの!? というかファンクラブってなに!?

「えーっと、とにかく落ち着け! ……いてよ!」

俺はひとまず事態の收拾にかかった。

彼らをリビングにまねき、お茶を淹れて——ちよつと驚かれたけど、このくらいは当然であ

る——ゆつくりと話を聞くことにした。

「でねー、蒼くんはねー、とつてもカッコいいのよー」

……というか、一方的なのろけ話を延々と聞かされていた。それも、あろうことか日向 蒼、すなわち自分に向けての。

そのどれもが身に覚えのないもので、若干ドン引きである。

「日向って、聞けば聞くほど女つたらしだよな」

別にたらしてなんかねーよ。勝手に惚れられてこちとらいい迷惑さ。

ジローの言葉に抗議したくなかったが、今はガマン。俺の正体がバレたら困る。

「あいつ、無駄に顔がよかつたからな……」

「だべだべ。クソ羨ましいよな。俺らなんか、幼稚園の近くを通りがかつただけで通報だぜ？」

「そりやお前らの素行が悪いからだ」

『だよなー(笑) ……ん?』

……あ、いかん。つい自然に会話に混ざってしまった。

口を塞ごうとしたときにはもう遅く……しかし。

「き、気のせいだよな。いまこの子が日向っぽいツツコミを入れたなんて」

「だよね……」

よかつた、気のせいで済ましたようだ。俺は人知れずほつとして――。

「気のせいと言えばさ、なんかこの部屋おしっこ臭くね？」

「ゴツフ！ げふつごふつ……」

思わず咳き込んだ。

「確かに、なんか臭いわね……。ねえタカオミくん、漏らした？」

「どーしてそうなる!？」

夫婦漫才乙……。つてそうじゃなくて。

俺はこっそりと手を股間に置いた。

……。どうやらいつのまにかお漏らししてたようだ。それも、一回ではなく複数回。

股間に触れる感触が少し湿っているのがその証拠だ。一回だけならさらさらのまんまだし。

軽い焦燥を抱くその間にも、会話は進む。

「どうかさ、さつきはこんなにおい無かったよな」

「確かに……。なら、やったのはこの中の誰かね」

「だな。まず冷静に考えて俺とタカオミはねーわな」

「だよな。男のお漏らしに需要はない」

「私は日向君のお漏らしなら見たいけど」

『うわあ……。女子怖え……。』

「ともかく、私もそういうのはないわ」

『……。ということは何？』

三人の視線が一気にこつちを向いた。

そして、トドメの一撃。

「この子、おパンツの辺りがふつくらしてね？」

「多分おむつだわな」

一発でバレた。その上で、女子代表三島さんは提案する。

「じゃあ替えてあげましょ？」

「おいやめてくれ変態委員長」

『……ん？』

つい素が出てしまった瞬間を、見逃されるわけがなかった。

「お前……もしかして日向か!？」

ああああああああああああああああああああああああああああああああ

!!!!!!

心の中で慟哭した俺をよそ目に、高校生たちの会話は続く。

「んなわけねーだろ。流石に常識わきまえろって」

「そうよ。普通、男が女の子に、それもこんなちっちゃい子になるなんて……」

タカオミと委員長が否定してくれている。まだ、まだ大丈夫——。

「でも、ならなんで委員長を『委員長』って呼んだ？」

——そういえば、目の前の女子は名前を名乗っていなかったことに今更気づく。少し呼ばれてたならまだしも、委員長なんて誰も呼んでいなかった。

すなわち、俺が本当になにも知らない部外者であれば、三島さんの「委員長」なんて呼び名を知る由もなかったのだ。

「いや、でも男が女に変わるなんて、漫画じゃあるまいし」

タカオミが言うと、今度は委員長が「そういえば」と、思い出したように話す。

「さっき、日向君の両親が海外逃亡した、なんて言ったでしょ？ あれ、実は彼らは薬学系の研究者で、海外には何かの研究に行ったなんて説があるんだけど……」

「なら……そういう薬とか作っても仕方ないってか？」

ちよつと待て、それは無理があると思うぞ。父さんと母さんはそんなことをするような人じゃないはずだし、そもそもそんな薬は常識的に考えて作れるはずもない。性別って薬で変えられるものなのか？

「まあ、確かに辻褄が合わんこともないな」

おいジロー。どうしてそう思った。小一時間ほど聞いただしたくなくなった。

……だが、これで言い逃れは出来なくなってしまうたようぞ。

すさまじい葛藤と逡巡の末に、結局うなだれて、ため息をつきながらげに告白した。

「はあ……正解。俺がお前らの探してた日向蒼だ。久しぶりだな。……ちよつと、おむつ替えてきてもいいかな」

その場は沈黙に包まれた。

俺が戻ってきた後もしばらく続いていた沈黙は「なあ、質問いいか？」という一声によって破られた。

「うん」と首を縦に振ると。

「……おむつって、お前なんかの病気なの？」

俺はびくりとした。

「い、いや、まだはずれてないだけ……」

恥ずかしさに、次第に声が小さくなり——無音に支配された空間——それに合わせたかのよう
うに一つの声が高らかに告げた。

「大きくなってもおむつが外れてなくて悩んでる女の子とか、超萌えね？」

『超わかる』

そのひとつの言葉を皮切りに、ロリコンたちの宴、もとい、いつもの会話が始まった。

そこからの会話の内容は長すぎて書ききれなくなりそうなので割愛するが。

「……そこから導き出される結論、それ、すなわち」

『お前、最高にかわいい』

そんな言葉を言われてマジで照れてしまったのは、マジでいけなかったと思う。あろうことか「ん……そ、かな。ごめ、ありがと……」なんて乙女な反応をうっかり示してしまったのは悪手だった。

今まさにヘンなことし始めそうな変態的な笑みを浮かべた親友たちの姿が網膜に焼き付いて離れなくなってしまった。襲われたりしなかったのは不幸中の幸い、というべきか。

「……そういえば、今更だが……俺がこの姿になったことは他言無用だからな」
会話が一段落してから、俺は軽く告げる。

「え？ どしてよ」

「逆にタカオミ、お前はどうか？ 自分が幼女になったとして、それを言いふらせる度胸なんであるか？」

「……すまん」

わかればいいのだわかれば。

そんなとき、しばらく俺たちを静観していた三島さんが、突如叫んだ。

「ちよ、これ！」

三島さんが差し出してきたスマホの画面。メッセージアプリの、おそらく個人同士のチャットにて。

ミツタカへおい、クラスチャ見てみる
ミツタカへ大変なことになってんぞ
ミツタカへ今、そっちに大量の女子が押しかけてきているらしい。俺もそれを食い止めるために向かっているところ
ミツタカへうわ、学校中の女子巻き込んでね？ いやこれヤバイ
ミツタカへとにかく、気を付けて

そして、自分もスマホを開いてクラスチャットを開いてみると、そこは地獄絵図であった。

みゆーみゆへうわ、いいんちよーが裏切ったば
ゆいにゃんへマ？
みつくへま。しかもあのそうさまのトリマキのロリコン野郎もつれて

めるめろ 〈ゲロキモ〉

りな 〈いいんちよ処刑ね〉

ニーナ 〈どーせだし、そうさまの目の前でやろうよ〉

かのん 〈いいじゃんそれ。そーさまもきつと喜んでくれるよ〉

りこりこ 〈じゃーいますぐシューゴーね〉

みゆーみゆ 〈さんせー〉

みつく 〈いこーいこー〉

りな 〈ガツコのみんなも誘ってくるわ〉

ゆいじゃん 〈ウラギリモノ殺すべし〉

「なに、これ……」

ある一種の、あまりにも醜い狂気のようなものが色濃く漂っているような気がする。

本当に意味の分からない行動。何が裏切りだ。処刑ってなんだ。そんなの見せられたところで誰も喜びはしねえよ。

……だから女は嫌いだったんだ。そんなクソみたいな女どもに好かれるよりかは、いつそ嫌われて避けられたほうがまだマシだ。

そう、だからこそ俺はロリコンを名乗って、皆に嫌われようとしたんだ。

幼稚な考えだったし結局誰にも嫌われることはなかったんだけど、いつしか幼女を見ることだけが心の支えになっていた。

気付けば本物のロリコンになっていた。

この姿になって、戸惑う中でどこかほっとしていただんだと思う。だって、この姿なら、もうあの醜い女どもから追われなくて済むから。

でも結局、逃れることは――。

「おい、しっかりしろ！ また漏らしてんぞ！」

そんな言葉に、揺らいでいた視界が元に戻る。

「――ッ、……ありがと、ジロー」

一瞬、いやな記憶がフラッシュバックしていた。未だにくらくらする頭を押さえ、俺はまた息を吐く。

「……でさ、どうする？」

タカオミが言うと、その場は沈黙に包まれて――玄関がどんどんと叩かれた。

「……そろそろ殺されるかな」

「なに言ってるんだ。いざつてときは俺が守ってやる」

「ありがと、タカオミくん。でも、いいわ。私のことなんだから」

そんなことを言いながら、委員長は玄関のほうに歩きだそうとし——タカオミは彼女の手首をつかんだ。

「おい！ どこへ行く気だ！」

「……」

「行かせねえよ。……お前が傷つくのは、見たくねえんだ」

沈黙。外から怨嗟のこもった喧騒が聞こえる中。

「じゃあ、どうやってこの騒ぎを鎮めればいいの!？」

叫んだ少女。数秒の沈黙ののちに、ジローが口を開いた。

「……多分、さ。あいつら……日向のことが心配でここに来たんじゃないか？」

俺は目を丸くした。

「え？ でも、委員長をころすとか……」

「それは口実だろ。いや、本気だった可能性もあるけど」

「……じゃあ、なんなんだよ、この騒ぎ」

「要するにさ、みんな日向のことが心配なんだ。俺たちも」

……よく耳を済ましてみると、外から聞こえたたましい怨嗟の声のなかに、俺を呼ぶものが混じっていたことに気付く。

「だから、お前の無事を伝えれば——」

数分後。

「なあ、あれ……」

「すごい……女子がみんな涙を流して膝をついてるわ……」

「え、ええ……？」

俺は盛大に困惑した。

どうしてこうなった。メッセーシアアプリを使って自分の生存を伝えただけなのに。

無論、ただ生きているというだけではなく、自分がどうして人前に出られなかったかも捏造して書いたのだが。

……アメリカの荒野のど真ん中にある家で軟禁されてるから誰とも会えない……つてのは流石にやりすぎた感がするけどさ。

「ほらな。やっぱりみんなお前のことが心配だったんだ」

ジローが笑いながら親指を立てた。

ひとまず俺はほうつと息をついて——ん？

なんか、せせらぎの音が聞こえる。下半身周辺の湿度が一気に上がってきた、ような気がする。

あつたかい。ほわほわして、まるで、お風呂の中でぶかぶか浮いているような——これはま

さか。

「ちっ、ち……」

「……出るの？ 出ちゃった？」

委員長がからかい半分で、幼い子供に話しかけるように聞いてきて。

「出で、る……」

俺は顔を真っ赤にして答えた。

「うおおお!! おもらし中の幼女可愛い!!」

「クツソわかる。最高じゃん」

「みないでよお……」

言いながら、しかし脱力して動けなかったので、俺はただ顔を手で隠すことしかできないのであった。

*

幼いころの、夢を見た。

いや、ねえね——翡翠さんもいたから、きっと本当にあったことじゃなくて、自分にとって都合のいい……まさしく、夢。

思わず涙目になって……誰にも見せないようにしながら、わたしはぎこちなくトイレへと駆け込んだ。

おむつを替えて教室に戻ると、途端に、一瞬だけ静かになる。

すぐにざわざわと騒ぎ出すけど、視線が少し突き刺さるのを感じる。

……何があつたんだろう。

わたしの名前が誰かの口から出ていることに気づかないふりをして——それにくつついた「おもらし女」なんて枕詞を聞かないふりをしながら、わたしは次の授業の準備をした。

昼休みのことだった。

「ねえねえ、るりちゃん」

いつもわたしとは別のグループで話してる、感じの悪そうな女が、ねっとりとした声でわたしの名前を呼んだ。

……この人、いつも他人をいじめてばっかで、嫌いだから……無視しちゃおう。

聞こえなかったふりをして保健室に向かおうとするが。

「るりちゃん、答えないと、おむちゆしてんの、みんなに言っちゃうわよ」

びくり。肩が震えた。

「ど、うして、それ、を」

「ぐうぜん、スカートの中が見えちゃって、ねえ。スパッツを穿いてなかった瑠璃ちゃんが悪いんだよ〜?」

煽るような、からかうような口ぶり。

「いっばーいおもらししてて、たつぷたぶで、臭かったわよ〜?」

がたがた、背筋が、顎が震えて、胸とのどがきゆうつと締まる。

そんなわたしにとどめを刺すように、女が、いやらしく、耳元で囁いた。

「中学生にもなって、恥ずかしくないの? ド変態赤ちゃん」

過呼吸になる。ああ、もう壊れそう。いや、だめ。だめ。だめだ。まだ、まだ耐えなきや。

「おむつしておもらししている中学生なんて、あなたくらいよ」

わたしには、やることだつてあるのに。がつこうだつて、まだ終わつてないでしょ?

「あなたみたいな赤ちゃんは幼稚園にも入れないはずよね?」

あおいちゃんのお世話も……ママやパパやお兄ちゃんの代わりに……私が全部やらなきやいけないんだから——。

「聞いているの!? 聞けよ! この糞尿垂れ流しクソベイビーが!」

息が、詰まった。

「いつつもいつも言うのはきれいごとばっかで、カッコつけて無口で、クールなんて気取っちゃってさ。それなのにみんなから好意的に見られて。そんなあんたがずっと昔から大っ嫌いだったんだよ」

「……」

「極めつけは、この前。恥ずかしいことしかして、みんなから笑われて……ザマミロって思った。けど、実際、次の日になってみりやみんなお前のことを慰めて。ウザったくて本当に嫌になった。殺してやりたいくらい」

息が詰まって、しゃべれなくなった。いや、安心して何にも考えられなくなって。

「でね、その日、偶然あなたの下着を見た。びっくりしたわ。おむつにおもらしてるなんてね。ああ、こいつ、本当は赤ちゃんなんだって。クールな顔して、そんな変態なことしてたんだって……笑うしかなかったわ」

「ちがっ……」

「どこが違うの!?!」

……何にも言えなかった。

「いつもは違う」その日はたまたま」と、いろいろと言いはあつたと思う。けど、そんなのは全部無駄だった。

だって、いままさにそんな恥ずかしいことをしているとかなのだから。

「それをみんなに知られれば、あなたの人生は今度こそ終わるでしょうね。ふふふ……いい気味。ふふふふ……ひやひやひやひやひやつつ!!」

そして、わたしは無理やり立たされ——「やだよつっ」

叫ぶと、女はわたしを殴りつけ、その手で首根っこをつかむようにして、廊下の真ん中に晒されて——彼女はもう片方の空いた手で、スカートの中身の秘密を曝した。

「この子、こんな中学生にもなっておむつしてま——す!!!! ド変態赤ちゃんてええええす!!」

涙で顔がぐちゃぐちゃになって、泣きながら、ただ「やめて、やめてよ」と繰り返すだけの人形になって。

そのうち、人だかりがわたしを嘲笑い。

仲のいい友達がわたしを助け出そうとして大喧嘩になって——珊瑚が先生を呼んできて半ば強制的に仲裁されるまで、わたしの周りは血みどろの戦いだつた。

わたしは何もせずに、ただ床に黄色い水たまりを広げながら、泣いて、泣いて、泣きじやくるだけだった。

ああ、わたしは、なんておろかで、はずかしいきものなんだろう。

だれか、たすけてよ。

いに。ねえね。ばば。まま。

ねえ、ねえ。だれか、だれか。

たすけてよ——。

わたしはまた、学校を早退した。

友達みんな、おむつをすることについて特に責めたりなんかはしてなかった。それどころか慰めてくれて。

そんなやさしさが、いまのわたしには、とても痛かった。気を使わせてるのが、とても心苦しくて。

逃げたかった。どこか遠い遠い、どこかへ。

坂の上、立ち止まって、ぼうつと遠い空、ぶかぶかと浮かんだ雲を見て――。
——いや、そんなことはしちやいけな。わたしはまだやれるんだ。やらなきやいけな
だ。

心に根拠のない鞭を振るって、わたしはまた足を動かし始めた。

*

さて、ジローたちが帰って行ってしばらく経ち。

「ただいま」

瑠璃が帰ってきた。

とことと玄関まで走って「おかえりー」と出迎えると、彼女の顔はひどいものだった。ひどく腫れた顔。涙の跡とそれを拭おうとした跡が悲惨にこびりついていた。

「どうしたんだ？」

心配から聞いてみると。

「なんでもない」

「……ほんとに？」

「なんでもないからっ！」

瑠璃は怒鳴り、俺は驚いてびくりとする。

こんなに気が立っている瑠璃は見たことがなくて、少し背中がぞわりとして——瑠璃ははつとしたように俺を見下ろした。

「ごめん、怒鳴っちゃって。怖かったよね。そんな思いさせちゃって——」

「いや、いいよ。大丈夫」

俺は、そんな風に言って安心させようとする could しかなかった。

……兄でない俺が、妹になった「私」が、弱くなってしまった自分が、ひどく無力な存在であるような気がして。

自室へと向かう妹の背中を見ながら、俺はそつとため息を吐いた。

それからあつという間に夜になって、腹がぐうぐうとなりだして……「るりー」

彼女の名前を呼んだ時、ふと気が付いた。

そういえば、このところ瑠璃に頼りきりだったな。

思えば、ご飯も初日のあれ以来瑠璃に作ってもらってたし、服も着せてもらってる。よくよく考えてみれば自分じゃ何一つできてない。

……このくらいの子供だったら当たり前かもしれないな。

そんなことを思ってから、しかし頭の中のものもやもやは晴れずにまた大きくため息をついて

……今夜は出前を頼むことにした。

瑠璃はもう寝てたので、一人きりの食卓。

届いたピザは幼女の胃袋には十分すぎるほどの量で、半分くらい残ってしまった。

……男だった頃はピザの一枚くらい普通に食えたんだけどな……。

過去のことを思い出して……でも、いまはそんなこと考えてる場合でもないよなと首を横に振って。

どうにかキッチンからラップを出してかけておく。

寝間着を取り出して、自分では着替えられないことを思い出した。まず、ワンピースの脱ぎ方がわからない。

しばらくチャレンジしてから、あきらめてこのまま寝る……その前に、おむつを替えた。

……夜用のテープのおむつは自分ではつけられないから、昼に使ってるのと同じやつを穿く。ベッドに飛び込むと、まぶたが一気に重たくなって、目を開けていられなくなつて。

意識は、闇の中へと溶けていった。

*

暗闇、浮遊。

無重力の世界。ああ、ここはいつもの夢だと悟る。

ぼうっと、ふわふわと浮かぶような心地に、夢の中だというのに眠気がしたそのとき。

「ねえ、蒼にい。おつかれ」

話しかけてくる、少女の声。

「うん、ありがと」

そんなお礼を言う野太い声。久々に出すその声にかすかな違和感を覚えながら。

「……早速だけど、あなたはどこまで知ってるの？」

俺が質問をすると、少女の声はくすくすと笑いながら答えた。

「もちろん、あなたの知ってることがすべて。だって、私はあなた自身なんだもの」

当然でしょ、と言わんばかりにその少女は笑ったのである。

俺はううむと少しだけうなづいてから、次の質問のために開口。

「じゃあさ、あなたが俺自身だというのなら——」

「はい、時間切れ」

「……また、それだ」

前も同じようなことを言われたような気がする。

「もっと、あなたと話していたかったのに」

つい、本心が口から漏れ出す。

「……話しててもいいわよ。ずっと目覚めなくてもいいならね」

現実での俺の姿とうり二つの女の子が、俺に向かってにこりと微笑んだ、ような気がした。
「瑠璃ちゃんが待ってるわ。ちゃんと目覚めなきや。あなたは、お兄ちゃんなんですよ？」

「ふふ、そうだな。妹であり、お兄ちゃんなんだ。心配はさせられねえ。ありがとう」
こうして、意識は浮上していく。

「頑張ってるね、蒼にい」

目に薄い光が差してからそんな幻聴が聞こえた。

曇天の朝のことだった。

あたまがふわふわとして、ぼうつとして、きもちい。

うつろにそらを見あげたら、めのまえにばぼとままがあらわれた。

「瑠璃^{るり}、起^おきたかい」

そういつて、ばぼがわらつて、ままもわらつた。

そうだ、わたしはるり。さんさいの、おんなのこ。かわいいるりちゃん。

ほうつていきをはいたら、からだからちからがぬけた。

「まま、ちつちでああ」

となりで、あおいちゃんがままにいった。

「あらあら、あおいちゃんは妹^{いもうと}なのにちつち教^{おし}えられてえらいわねえ」

……ちつちとれーにんぐ、おいこされちやつたかなあ。でも、それでいいや。

「えへへ、じゃー、るりたんがいもーとだ。まだおむちゆなんだもん」

あおいちゃんがじぶんではけるおねえちゃんおむつをみせつけてきた。

るりはまだおむつもじぶんではけないもん。ちつちもわかんないもん。まだ、あかちゃんだ

もん。

「やつたー！ あおいねーねー！」

「いひひ。るりたーん」

わたしはごろんつてして、そのままはいはいであおいちやんとおあそびしようとする。

「るりちやーん、その前まえにおむつかえかえよ」

ままにとめられちやったの。むう。

「ん……おはよ。るり、あおい。パぱとママまも」

あつ、にーがおきてきた！

『おはよー、にーに！』

「うん。おはよ。きょうもかわいいな、ふたりとも」

そういつてあたまをぼんぼんするにーに。ちよつとえらそーだけど、なんかおちつく。

……とつてもしあわせ。みんながやさしくしてくれて、なんにもこわいものなんてなくて。

もう、目覚めたくないよ。

「ばば、まま、にーに。……あおいちやん。ずっと、そばにいてくれる？」

幸せな夢の中、わたしは不安感に駆られるように、口から言葉があふれ出た。

果たして、四人は少しだけわたしを見つめてきよんとんとして、すぐに笑いだす。

「ははは、当たり前だろう」

「そうよ。変なこと言うわね」

「ぼくがたいせつないもうとをおいてどっかにいくわけないじゃん」

「るりたん、だいしゆきー！」

だよね、そう。そうだよね。

「ごめん、わたしもだいき」

「もう、何言ってるのよ。ほら、おむつ替えるわよ」

なんとなく遊びたくなつてとことこと歩いて逃げようとして、パパに仰向けに転がされて、それでみんな笑って——しあわせないちにちが、はじまつた。

おひさまがにこにこわらつてる、そんなおてんきのあさだった。

*

暗く、薄い光がカーテンから差し込む。

光を遮るそれを開けようとしてベッドから起き上がると、下半身はいつものように重くなつていた。

ひとつため息を吐くと、その状態のままリビングへと向かつて。

「るりー……」

妹の名前を呼んだ。しかし、返答はない。もう一度呼び、しかしまたも返答はなく。

……なんとなく、嫌な予感がした。

たまたたと瑠璃の部屋へと駆けていく。

夜の失敗を存分に受け止めて大きく膨らんだおむつが動きを阻害して、とても走りにくい。そのせいで何度も転びかけた。だから、早くおむつを替えてほしかったのだ。

「るりー」

彼女の部屋に入ると、尿の独特な臭いが鼻をつく。

瑠璃もいっぱいおねしょしてたんだな、なんて少し笑いつつ、しかし呼んでも反応のないことにわずかな不安を覚えた。

それを振り払うように頭を振って、彼女のベッドに駆け寄る。

「るり……早く起きないと学校に遅刻するぞー」

いまだに寝ていた瑠璃を揺さぶりながら、声をかけて——けれど彼女は安らかな寝顔を崩すことなく眠り続ける。

「おい、るり……起きろって！ 早く起きてよ！ るり!!」

いよいよ強くなる焦燥感。不安感。しかし、どんなに揺さぶっても、どんなに声をかけても、目覚めない。

叩いて、ゆすつて、叫んで。

「るり！ るりっ!!」

死んだように目覚めない彼女。

一生目覚めなかつたらどうしよう。そんな不安が頭を強くよぎって、胸が絞まるような感じがして——涙が、こぼれだした。

「るり、るりい……うわああん！」

俺は——わたしは声を上げて、泣き出した。

あさおねっ

#3 始まりの終わり

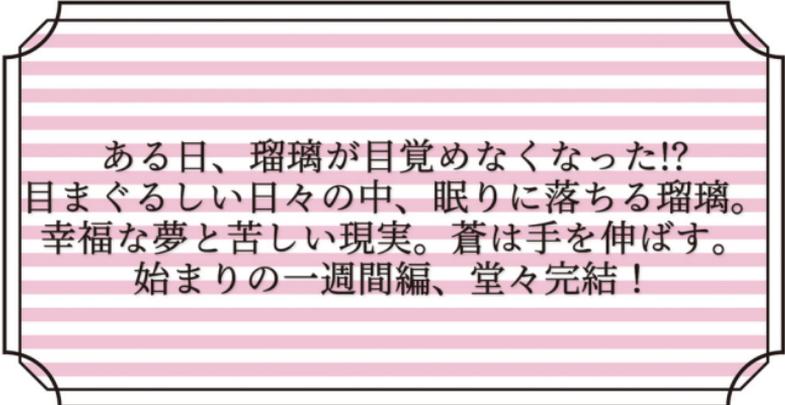
2024/1/10 初版

奥 付

発行 桜花庵 さくら工房 クロスロード文庫
著者 沼米 さくら
URL https://twitter.com/Numabe_Hentai
E-Mail そんなものはない



本書の無断複製、複写、転載を禁止します。
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
(<http://tokimi.sylphid.jp/>)



ある日、瑠璃が目覚めなくなった!?
目まぐるしい日々の中、眠りに落ちる瑠璃。
幸福な夢と苦しい現実。蒼は手を伸ばす。
始まりの一週間編、堂々完結!